

## 内受容感覚の概要と研究

庄子雅保<sup>1,2,3</sup>・Beate M.Herbert<sup>1</sup>・Daniela Bauer<sup>1</sup>・Martin Hautzinger<sup>1</sup>

Klinische Psychologie und Psychotherapie, Universität Tübingen<sup>1</sup> 国立国際医療研究センタ

一国府台病院心療内科<sup>2</sup> 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部<sup>3</sup>

心と身体の関係については数多く研究されてきたが、近年、心と身体の関係についてのトピックの中でも内受容感覚が注目されている。触覚、聴覚、視覚などを介して外部環境をとらえる外受容感覚に対して、内受容感覚とは、呼吸、痛み、体温、心拍、胃腸の動きなどの生理的な状態や内臓感覚に関する感覚のことである。内受容感覚は、ホメオスタシスの維持に必要な不可欠な機能といわれ、内受容感覚によってもたらされた身体内部の情報を使用し、身体機能を恒常的に維持していると考えられている(Craig,2008)。

内受容感覚は、主に心拍検出課題を使用することによって測定されている。心拍検出課題は被験者にかかる負担も少なく簡便に使用できる方法である。その他には、Water Load Test を使い、消化器に関する内受容感覚を測定しようとする試みも行われている(Herbert,Muth,Pollatos and Herbert,2012)。基本的には実験的課題を使用し、内受容感覚は測定されるが、一方で質問紙を使用した内受容感覚測定も以前より積極的に行われている。近年では、内容用感覚を多面的にとらえた新しいタイプの質問紙も開発されているが、(Mehling, Price, Daubenmier, Acree, and Bartmess, 2012)、内受容感覚を質問紙で測定することは困難であり、質問紙での測定は現在も様々な問題を含んでいるといえる。

内受容感覚は不安をはじめとする感情、アレキシサイミアなどの感情に関連する性格因子、意思決定などの認知機能との関連があると考えられている。日本独自の理論としての失体感症と内受容感覚は共通する部分も多く、今後の研究が待たれるところである。当日は、内受容感覚の基礎と、測定方法それに関連する研究を取り上げていく。